

言語教育(学)と異性愛規範

—日本語教育(学)をめぐる—

小宮 明彦

1. はじめに

社会における異性愛規範を批判的に問い、異性愛主義構造の(再)生産過程を分析する試みは、種々の学問領域を横断しつつ広がってきている(例えば、平野1994、ヴィンセント他1997、風間他編1998、小宮2011a、小宮2011bなど)。しかしながら、日本語教育(学)領域においては、塩崎(2000)や後述する熊谷(2008)を除いて多くない。

そこで本稿では、異性愛規範の(再)生産をめぐる日本語教育(学)を批判的に捉えつつ、当該領域におけるセクシュアリティ研究の可能性を提起したい。そのため本論では、はじめに、向後の当該研究に備えて近接諸領域における若干の先行研究に言及する(2節)。それを踏まえて、実際の日本語教科書数点をセクシュアリティの観点から調査し、日本語教科書が異性愛規範の(再)生産を促進している可能性を指摘する(3節)。次に、日本における非日本語母語話者への日本語教育(学)における異性愛規範を捉える合わせ鏡として、英語圏における非英語母語話者への英語教育における異性愛規範を批判的に精査している研究を紹介しつつ、それらを元に日本語教育(学)をめぐる若干の考察を行う(4節)。続いて、日本語教育(学)をめぐるセクシュアリティ研究の可能性を述べ(5節)、最後にまとめを述べる(6節)。

本稿では「異性愛規範」と「異性愛主義」を互換的に用いる。特に記さない場合、英語文献からの翻訳は小宮による。

2. 先行研究：言語教育(学)の中の^{セクシュアリティ}性

川上(2007:5)は、日本語教育と日本の文化をめぐる論考で、「日本語のうしろには、ことばでは直接表現されていない日本人の心の交渉がある」(池田197:100)ことや、「中村さんのへやは2階の6畳です。」という文を教えると

き教授者は「下宿」や「2階の6畳」などの「語彙の奥ゆきが深く日本の住生活にかかわっていること」(佐藤1985:63-77)を引用して、そうした文化を「自覚しておくべき」ことに注意を向けている。

また佐々木(2000:1)は、「外国人に日本語・日本文化を教えるという仕事に携わる中で、バロック音楽の通奏低音のように流れていた思い」として、日本語の中にひそむ「言葉とジェンダー」の問題を挙げている。言葉の奥ゆきや背後に通奏低音のように一連の文化事象があるという意味でこれらの指摘と響きあうのがヴィンセント(1997:101)とマリィ(1998:125-128)の指摘である。ヴィンセントは、『異性愛』とは、『広辞苑』に収集されるべき独立した語彙というよりもむしろ、『広辞苑』に含まれているすべての言葉の背後のニュアンスを司る、あらゆる言葉の使用に際しての大条件」とも論じられるのではないかと言う。マリィは、「恋」「愛」「恋愛」といった語が辞書の定義において異性同士のものとして描かれていることを指摘しており、さらに、例えば辞書の「性行為」の語釈が「性欲に基づく行為。特に性交」(下線は小宮)などという、「異性間」や「男女間」などの限定がない場合でも、同じ辞書で今度は「性交」を引くと、「男女の性的な交わり」などとあり、結局異性間に限定されることを明らかにしている。

隣接領域に目を向ければ、小宮(2011a, 2011b)において示されている通り、国語教育において重要な役割を果たす国語教科書が日本の異性愛主義の構築を促進してもいる。翻って、英語圏ではLiddicoat(2009:191)が、言語教育において性^{セクシュアリティ}愛と性アイデンティティが顧慮されるようになったのがつい最近であることを指摘しつつ、以下のように言う。

性に関する問題が考慮されていないときでも、そのことが性が不在であつたり中立的に存在したりすることを意味するわけではない。むしろ、なんらかの性アイデンティティ(すなわち異性愛アイデンティティ)が、性に関するすべての議論を導く無思慮無批判な規範として制定されている。

このこと具体例としてLiddicoat(2009:191)は、結婚、恋、さらには作

り話や実話の生活史などという異性愛に基盤を置いた社会のイメージを通して、言語の教室には常に潜在的に異性愛が存在していると述べている。

つまりこういうことである。Coates (2013:537) は言う。

異性愛は、ジェンダー同様、遂行されるものである (Butler1990を参照) ; すなわち、性アイデンティティは反復的且つ相互作用的に達成される。これらがなされる方法の一つが言語を通してのものである。異性愛にはよく発達した以下のような言葉があり、日常会話には異性愛的言及がちりばめられている。妻、夫、婚約者、ボーイフレンド、ガールフレンド、結婚、結婚式、婚約、ヘン/スタッグ・パーティー (小宮注: 前者は結婚直前に女性の友達だけで開くパーティー。後者はその男性版)、離婚、カップル、義理の親戚など。これらの言葉を引くことによって、話者は自分を異性愛であると位置づけているのである (例えば、Motschenbacher2012; Rendle-Short2005を参照)。

これらを踏まえて日本語教育(学)に目をやれば、教育現場において異性愛規範が伝達されている可能性が容易に推認される。そこで次節では、性愛をめぐる複数の日本語教科書を概観し、日本語教科書が伝達していると考えられる性愛をめぐる規範をあぶり出したい。

3. 日本語教科書調査

本節では、版や増し刷りを重ねており関係者から支持を集めていると考えられる複数の日本語教科書から、性愛をめぐる表現や内容をいくつか取りだし、以下に列挙する。

(あ) 単語の意味の確認問題で、空欄に適語を補充させる問題: 「あの夫婦は () ことでいつもけんかしています。」 (下線は小宮)

(小柳他 2007a:58)

(い) 本文の内容: 異性同士の結婚式への招待状がきて、それを端緒として新郎新婦の人となりや関係性、将来に思いを馳せている。

(松田他 2006:7)

(う) 本文の内容：(い)で述べた招待状の形態。新郎新婦の学生時代の馴れそめなどとともに結婚式への招きが述べられている。

(松田他 2006:8)

(え) 本文の内容：遠隔地に単身赴任していると思しき「父」に「息子」が書いた手紙の形態をとっている。そこでは「母」と「妹」の様子も温かくユーモアを湛えて描かれている。

(松田他 2006:13)

(お) 本文の内容：新聞などへの投書という形態。「あいさつするのは変なことか」という見出しで、夫の仕事の関係で20年近く海外生活をした後約20年ぶりの日本（東京）において、自宅マンションのエレベーターで乗り合わせてもあいさつしない人たち、ひいてはそうした人々を取りまく社会状況に思いを馳せながら、自身はあいさつをし続けていることが描かれている。（下線は小宮）

(文化外国語専門学校 2005:13)

以上のように、日本語教科書には、(異性愛の婚姻関係である) 夫婦、(異性同士の) 結婚、異性愛のカップルを起点とする家族などが描かれ、表象されている。他方、同性同士の性愛を顕在的あるいは潜在的に述べる記述は日本語教科書において一般的とは言えず、筆者も調査対象とした教科書から探し出せなかった。このような意味で、日本語教科書には異性愛規範が埋め込まれていると指摘できる⁽¹⁾。

日本語教科書に典型的・多数派とされる人物像や家族像が用いられる主な理由として、外国語学習の教材という特性ゆえ、多数の人に理解・受容されやすい物語が紡がれていることが推測され、それゆえ異性愛を前提とした社会システム以外の在り方を教科書に盛り込むのは難しいことが挙げられる。

しかし、典型的とは言えない、離婚などが推測される人物表象も見られる。例えば、文化外国語専門学校(2010:220)には、村おこしをテーマとした課があり、架空の3人の人物が登場する。地主の清原まさるさん(65)には、妻

(64)、長男(35・既婚・東京在住)がおり、過疎地を希望して赴任した石毛ひろしさん(27)は独身の小学校教諭である。一方で、食堂経営の桑田圭子さん(60)は長女(38・既婚・他県在住)がいるのに配偶者の記述がない。これは、一般にイメージされている異性カップルを単位とした家族ばかりでなく、離婚したり死別したり婚姻届を出さずに子どもをもうけたりする人も実際にはいることから、そうした現実の一端を描いているとも解釈できる。また、俗にいう「女の色」としての赤やピンクと「男の色」としての黒や灰色などをめぐる今昔という、ジェンダー規範意識を主題化した文章も見られる(松田他 2006:44-45)。このように、必ずしも典型的でないといわれる人物設定があったり既存の性別固定観念を相対化する文章があったりすることからは、人々の意識の変化や教科書作成者の判断によって現実に即して多様な性と生を表象した教科書を創ることも可能であることがわかる。

次節では、非英語母語話者への英語教育における異性愛規範を批判的に精査している研究を、非日本語母語話者への日本語教育(学)における異性愛規範を考察するための合わせ鏡として参照し、それを元に若干の考察を行う。

4. 英語非母語話者への英語教育(学)におけるセクシュアリティ研究から

1990年代初頭より、(小宮注:英語圏)言語教育、特に英語教育領域において性アイデンティティへの関心が高まってきており、ゲイやレズビアンが登場人物を含む文学作品を教えたり、教室や教材における同性愛嫌悪に対応したりされてきている(Nelson 2009:4)。本節では、そのような英語圏の言語(英語)教育におけるセクシュアリティ研究(Nelson 2009など)からいくつかの論点を取り出し、日本語教育(学)に引き寄せて若干の考察を試みる。

4.1 社会的紐帯としての異性愛主義

Nelson(2009:76)は、面接調査をしたレイチェルの言葉から、社会的紐帯として異性愛主義を用いる行為の存在を指摘して言う。

異性愛主義を社会が機能するのに寄与する社会的行為として理解しながら

ら、レイチェルは、様々な国から来た人々に理解されやすく面白がってもらえるものゆえに、異性愛主義的なユーモアは学習者たちの多様な集団をまとめるのに寄与すると述べた。

これは、日本語教育にもあてはまるだろう。レイチェルやネルソンは異性愛主義的ユーモア的具体例を示していないが、例えば、打ち解けた雰囲気を出すためだからといって生徒たち全員を異性愛者と規定して恋にまつわる(滑稽な)話を重ねるとすれば、その授業は異性愛主義的な色彩を帯び始める。そうした授業が続けば、異性愛者以外は疎外感や抑圧を感じ続けるだろう。

4.2 セクシュアリティをめぐる教師の自己省察

Nelson (2009:38) は、言語教師への面接調査から、生徒の中にゲイがいる教師(ティナ)の発言を以下のように記している。

私の(EFL)(小宮注:外国語としての英語)授業にゲイの生徒が一人いたんですね。そうすると自分が言うことについてとても違って考えるようになったんです。例えば教科書を開けるとビルとスーザンが土曜の夜にデートする予定を立てていたり。それからどの章でもそこに挙がっているのは、ええと、バレンタインに彼は彼^{ガールフレンド}女に花をあげた、とか。それで、、、本当にすべての例に明らかにそういう偏見があるんです。どういう風に埋め合わせたらいいんでしょう。<以下略>

このように自分への問いを面接者とも共有しながら、ティナは、「男性が彼^{ガールフレンド}女または彼^{ボーイフレンド}に〜<以下略>」などと言うことを試みていると語っている(Nelson 2009:38)。つまり、男性を異性愛者と規定しない言い方をするということである。ティナはまた、そのようなティナの発言で笑う生徒がいることや、自分のこうした行動がいくぶん文化帝国主義的なのではないかという懸念を表明している(Nelson 2009:38)。

しかし、笑う生徒には、笑いごとではないことを伝えたり多様なセクシュ

アリティの簡潔な解説をしたりしてすぐにもとの授業内容に戻ればよいし、文化帝国主義についての懸念に関しては、ティナの発言は性的少数者への寛容の度合いを強めている英語圏の文化や人権概念に基づいた発言として穏当であり、文化帝国主義的とも言えないだろう。このことは、日本語教育(学)にも当てはまる。日本の法務省は、「主な人権課題」として、外国人などとともに同性愛者や両性愛者、性同一性障害者の人権状況にも憂慮を示している(<http://www.moj.go.jp/JINKEN/kadai.html>)。このこと一つをとっても、日本では、これらの性的少数者の人権が十全に守られていないことや、それゆえ性的少数者の人権が尊重される教育活動が日本の教育現場で行われることが不穏当とは言えないことなどが指摘できる。

4.3 性的移住者、性的亡命者としての性的少数者

セクシュアリティを理由に海外に住んだり母国を追われたりする人がいる。1990年に出版された『同性愛事典』(*Encyclopedia of Homosexuality*)に「Exiles and Émigrés」(「移住者と亡命者」)という見出し語があることから、セクシュアリティと移住や亡命の密接な関係が見て取れる。Nelson(2010:446)はCarrillo(2004)を典拠としながら、少なくともある部分でセクシュアリティに関係する理由で移住する人のことを移住学(migration studies)において性的移住(sexual migration)と呼ぶことを紹介している。また、同性愛を自認する移住者や留学生が一般に認識されているよりもずっと言語の授業に多いであろうことを指摘している(Nelson 2010:455)。

翻って、何らかの理由で日本に来て日本語を学んでいる人々の状況はどうだろうか。例えば、中国には同性愛者が4000万人おり、子孫繁栄や血縁といった伝統観念や、偏見、差別に苦悩していると伝えられている(産経ニュース2014年3月8日)。

韓国では伝統的な儒教思想およびキリスト教に基づく家族主義が強く、韓国女性政策研究会によるマイノリティ差別に関する2006年調査では、同性愛者に対する差別意識が最も強く、2011年調査でもその傾向が強まったという(渡辺 2013:150)。また、ゲイ少年の残酷な思春期が報告されてもいる(キム

ジョ 2011)。

ロシアでは2013年に同性愛宣伝禁止法(反同性愛法)が施行され、中東やアフリカには性的少数者に対する激しい差別がある(富塚他 2012、富塚 2013、<http://www.amnesty.or.jp/human-rights/topic/lgbt/>)。このような状況に鑑みると、自国における血縁のしがらみや差別的環境から逃れるためという理由もあって日本に来て日本語を学んでいる人も少なくないのではないかと推察される⁽²⁾。しかしながら、既述した日本語教科書の異性愛主義的性格などに象徴されるような現在の日本の状況を考えれば、たとえ上記の理由で日本に来たとしても、それを率直に表明する人は少ないだろう。次節では、これまでの議論を踏まえて日本語教育(学)の展望を述べる。

5. 日本語教育(学)とセクシュアリティ研究

日本語(教育)研究は、少なくとも前世期の終わりに一部では同性間の親密性に対して自覚的であった。例えば、佐々木(2000)には見出し語として「同性愛」や「男色」がある。同書の「同性愛」には、後に疑義が呈されている(高森 2001:193)同性愛者発生のストレス原因説などへの言及もあるが、最後を「現在、社会のルールやシステムは、『すべての人間が異性を愛する』という前提のもとに作られている。今後、われわれはどのようにこの偏見をとりぞいていくべきなのだろう」という言葉で結んでおり、日本語研究においていち早く異性愛主義の超克を志向する態度を表明していたことがわかる。

2008年には、第1節でも言及したように、既存の社会構造として異性間の恋愛関係のみを表象する日本語教科書を批判的に論じた考究も著されている(熊谷 2008:140-141)。このような研究動向と近年指摘されている日本語教育(学)の学際性(日本語教育学会 2007)に鑑みれば、日本語教育(学)におけるセクシュアリティ研究が今後ますます蓄積されていくことが期待できる。特に、一般に年少者は年長者と比べて脆弱性が高いため、年少者日本語教育(日本語教育学会 2006)の分野においては、学習者が性的少数者であった場合には、年長者よりも多くの困難に直面しやすいと言える。そこで年少者日本語教育領域では、一層の研究上、指導上の配慮が求められよう。

6. まとめ

本稿では、日本語に内在する異性愛規範の存在を確認したうえで日本語教科書の異性愛規範を析出した。また、英語教育(学)のセクシュアリティ研究から示唆を得て日本語教育(学)とセクシュアリティをめぐって若干の考察をした。さらに、日本語教育(学)とセクシュアリティ研究のこれまでを点描し、今後の展望を述べた。

なお、教育実践、ひいては学習者の人権状況に直結する本論の性質上、即時性を優先してこれまでの日本語教育(学)が見過ごしがちであった論点を提示し、それらについて若干の考察をしてきた。各論点の深化、日本語教育(学)をめぐるより広範な学際的調査・研究は、未来に開かれている。

注

- (1) 良^{うしろ} (2014:110-111)によれば、家庭科の教科書の中には、「同性を好きになる人」などの存在や「性のあり方」が「個人によってさまざま」であること、さらにはフランスにおいて異性カップルと同様に同性カップルにも適用されるパクス(連帯市民協約)について記しているものもある。
- (2) 実際にマクレランド (2005:120) は、英国のケンブリッジ大学卒業後の1988年から1年半のほどの東京大学への留学の理由を、以下のように述べている。

「当時のイギリスはサッチャー首相の時代で、同性愛者にとってはすごく厳しい状況でした。サッチャー政権は14年間続き、伝統的な家族を擁護する政策を進めました。また、イギリスでは88年にセクション28という条例が作られ、同性愛を肯定あるいは推進するような教育や出版活動に対していっさい公的資金の利用を禁止するようなこともありました。同性愛者に対して厳しい条例を作るような社会情勢がイヤになって、私はイギリスを離れようと決心したのです。」

和文参考文献

アムネスティ・インターナショナル「LGBTと人権」

<http://www.amnesty.or.jp/human-rights/topic/lgbt/> (2014. 11. 23)

池田摩耶子 (1971)「日本語教育と日本の文化」『講座 日本語教育』9 pp. 90-103 早稲

田大学日本語研究教育センター

ヴィンセント・キース他 (1997) 『ゲイ・スタディーズ』 青土社

風間孝他編 (1998) 『実践するセクシュアリティ—同性愛／異性愛の政治学』 動くゲイとレズビアンの会

^{うしろ}良 香織 (2014) 「家庭科教育における性教育—家庭科でどのような性教育を展開できるのか」 ③小学校～高校における家庭科の性教育のポイントと課題』『季刊セクシュアリティ』 68 pp. 108-115 エイデル研究所

^{おやなぎ}小柳昇他 (2007a) 『ニューアプローチ 中上級[基礎編]』 AGPアジア語文出版

^{おやなぎ}小柳昇他 (2007b) 『ニューアプローチ 中上級[完成編]』 AGPアジア語文出版

川上郁雄 (2007) 「『ことばと文化』という課題—日本語教育学的語りと文化人類学的語りの接合」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』 20 pp. 1-17 早稲田大学日本語教育研究センター

キムジョ・グァンス (2011) M.S訳 「ゲイ少年の残酷な思春期」

The Hankyoreh Japan. <http://japan.hani.co.kr/arti/culture/7422.html> (2014. 11. 22)

熊谷由理 (2008) 「『日本語を学ぶ』ということ—日本語教科書を批判的に読む」佐藤慎司・ドーア根理子編著『文化、ことば、教育—日本語／日本の教育の「標準」を超えて』 pp. 130-150 明石書店

小宮明彦 (2011a) 「このテキストにジェンダーはありますか—批評理論、国語教科書、性の政治学」『民主教育研究所年報』 11 pp. 246-272 民主教育研究所

小宮明彦 (2011b) 「国語教科書の中の異性愛主義—『目に見える制度』の中の『目に見えない制度』」『ことば』 32 pp. 32-54 現代日本語研究会

佐々木瑞枝 (2000) 『女と男の日本語辞典 上巻』 東京堂出版

佐藤洋子 (1985) 「日本語教育における『文化』の扱い方」『講座 日本語教育』第21分冊 pp. 63-77 早稲田大学語学教育研究所

産経ニュース 「中国400万人の同性愛者 伝統観念や偏見、差別に苦悩」

<http://sankei.jp.msn.com/world/news/140308/chn14030801270001-n1.htm>

(2014. 11. 22)

塩崎紀子 (2000) 「日本語教育という装置」栗原彬他編『越境する知4 装置：壊し築く』 pp. 243-263 東京大学出版会

- 高森晃一 (2001) 『性的指向』の科学をめぐる啓蒙の現状 伏見憲明編『クィア・ジャパン Vol. 5』 pp. 182-202 勁草書房
- 富塚直美他 (アムネスティインターナショナル日本) (2012) 「アムネスティレポート④ トルコ: 今こそLGBTに平等を！」『季刊セクシュアリティ』 58 pp. 66-169
- 富塚直美 (アムネスティインターナショナル日本ジェンダーチーム) (2013) 「アムネスティレポート⑦ ケニア: 3人の『犯罪者』—LGBTとして生き抜く—」『季刊セクシュアリティ』 63 pp. 130-133 エイデル研究所
- 日本語教育学会 (2006) 『日本語教育 【特集】 年少者日本語教育の現在—その課題と展望』 128
- 日本語教育学会 (2007) 『日本語教育 【特集】 日本語教育とは何か』 132
- 平野広朗 (1994) 『アンチ・ヘテロセクシズム』 パンドラ
- 文化外国語専門学校 (2005) 『文化中級日本語 I』 凡人社
- 文化外国語専門学校 (2010) 『文化中級日本語 II』 凡人社
- マクレランド、マーク (インタビュアー: 伏見憲明) (2005) 伏見憲明編『クィア・ジャパン・リターンズ Vol. 0』 pp. 118-125 ポット出版
- 松田浩志他 (2006) 『テーマ別 中級から学ぶ日本語改訂版』 研究社
- マリィ、クレア (1998) 「性意のあることば」『現代思想』 26-10 pp. 122-135 青土社
- 渡辺大輔 (2013) 「韓国レポート⑤ 男性同性愛者の人権啓発・支援団体「Chingusai (チングサイ)」の活動」『季刊セクシュアリティ』 62 pp. 150-153 エイデル研究所

英文参考文献

- Butler, Judith. (1990) *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. London: Routledge.
- Carrillo, Héctor. (2004) Sexual migration, cross-cultural sexual encounters, and sexual health. *Sexual Research and Social Policy*. 1, pp. 58-70.
- Coates, Jennifer. (2013) The discursive production of everyday heterosexualities. *Discourse & Society*. 24(5), pp. 536-552.
- Liddicoat, Anthony J. (2009) Sexual Identity as Linguistic Failure: Trajectories of Interaction in the Heteronormative Language Classroom. *Journal of*

Language Identity, and Education. 8, pp.191-202.

Motchenbacher, Heiko. (2012) 'I think Houston wants a kiss right?': Linguistic Constructions of heterosexualities at Eurovision Song Contest press conferences. *Journal of Language and Sexuality*. 1(2), pp.127-150.

Nelson, Cynthia D. (2009) *Sexual Identities in English Language Education*. New York: Routledge.

Nelson, Cynthia D. (2010) A Gay Immigrant Student's Perspective: Unspeakable Acts in the Language Class. *TESOL Quarterly*. 44(3), pp.441-464.

Rendle-Short, J. (2005) 'I've got a paper-shuffler for a husband': Indexing Sexuality on talk-back radio. *Discourse & Society*. 16(4), pp561-578.

Wayne, R. Dynes. (Ed.) (1990) *Encyclopedia of Homosexuality*. Vol. 1 New York & London: Garland Publishing.

(こみや あきひこ)